キャンパス・コンソーシアム函館

合同公開講座

函館学　2018

第3回講義

講義資料

日本中世の貨幣をめぐる諸問題

田中浩司　函館大学教授

中村和之　函館工業高等専門学校教授

日時：平成30年12月1日（土）

13：30～15：00

会場：函館大学　　161講義室

主催：キャンパス・コンソーシアム函館

キャンパス・コンソーシアム函館

合同公開講座

函館学　2018

第3回講義

講義資料

日本中世の貨幣をめぐる諸問題

～この20～30年ほどでわかってきたこと～

田中浩司　函館大学教授

日時：平成30年12月1日（土）

13：30～15：00

会場：函館大学　　161講義室

日本中世の貨幣をめぐる諸問題

～この20～30年ほどでわかってきたこと～

講師略歴

田中浩司　（たなか　ひろし）　　函館大学 教授

1963年（昭和38年）東京都生まれ。中央大学文学部卒業。中央大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。中央大学非常勤講師などを経て、1998年（平成10年）、函館大学専任講師。2011年より現職。1995年度、能ヶ谷出土銭調査団顧問（東京都町田市）、1995～2000年度、国立歴史民俗博物館共同研究員、1998～2004年度、日本銀行金融研究所貨幣史研究会（東日本部会）会員。

専攻は日本中世経済史。室町・戦国時代の貨幣流通史や金融史。室町幕府、貴族・寺社の経済、それらの領主間の関係を、儀礼・宗教、経済的な視点からとらえる研究を進める。

主な論文に「貨幣流通からみた一六世紀の京都」（鈴木公雄編『貨幣の地域史』所収、岩波書店、2007年）、「十六世紀後期の京都大徳寺の帳簿史料からみた金・銀・米・銭の流通と機能」（『国立歴史博物館研究報告』第113集、2004年）、「儀礼からみた中世後期の領主経済の構造と消費」（『国立歴史博物館研究報告』第92集、2002年）などがある。

報告概要

ここ20～30年間ほどの間に、日本中世の貨幣史研究は大きく進展してきた。その大きな原動力となってきたのは、多くの出土銭の発掘事例とその分析成果によるものである。北海道における具体的な出土銭の事例分析については、本講座の後半での中村教授の講演にお任せすることになる。

そこで私の講演では、ここ20～30年間でここまでわかってきたという、日本中世（おおむね12世紀末から16世紀。鎌倉時代から本報告では織豊時代を含む）の貨幣史研究の成果、トピックス的なものを選んで、私自身の研究成果も含めて紹介したい。

主要な項目として、鎌倉時代の貨幣、渡来銭の日本国内への流入契機、国内に流通した銭貨、国内での銭貨生産、悪銭、16世紀の金・銀の普及・用途など。

キャンパス・コンソーシアム函館主催
合同公開講座「函館学」 2018

日本中世の貨幣をめぐる諸問題

～ここ２０～３０年間でわかってきたこと～

函館大学
田　中　浩　司

会期：2018年12月1日（土）13:30～15:00
会場：函館大学　161教室

日本の中世と貨幣について　おさらい１

１．日本中世とは

□ 古代：　古代：　　～平安時代中期

□ 中世：

中世成立期：平安時代後期　10世紀～or　12世紀初頭～

中世前期：鎌倉時代：12世紀末～1333年

中世後期：

南北朝時代：1333年～1392年

室町時代の目安：始期1392年～終期の諸説　1466年 応仁の乱開始　等

戦国時代の目安：15世紀後半・末期～

□ 近世

織豊時代の目安：1568年（信長、足利義昭を奉じて上洛）～1599年

江戸時代＝1600年（家康、関ヶ原合戦で勝利）～

→今回の田中の報告では、<u>鎌倉時代から織豊時代まで</u>を視野に入れる

＊本講座で、「以前の講座・講演」とあれば、函館学2012での「函館志海苔出土銭と中世貨幣史研究」の講演のことを示す（その内容は〔田中浩司 2014〕所収）

日本の中世と貨幣について　おさらい2

２．貨幣とは、おカネとは

➢ 貨幣を機能・役割という観点からみると？

①交換の媒体　　②支払いの手段

③価値尺度の役割（価値の大小がわかる単位、ものさし）

④価値蓄蔵の手段（価値を蓄え、保存しておく）

・・・経済学では、①～④の４つの機能を果たしている「モノ」を 「貨幣」とよぶ

- これ以外の貨幣の機能としては・・・贈答品（お祝い金、香典、お賽銭など）

⇒以上の点から、現代のおカネ＝貨幣

➢ 信用と価値からみた貨幣

名目貨幣：政府などが信用と価値を付与（現代の日本銀行券など）

商品貨幣（現物貨幣）：貨幣として以外に用途のある貨幣

秤量貨幣：貴金属の価値で、その重さを量って通用（金地金など）

➢ 貨幣の素材は？・・・ **モノ**は何でもよいが、変化しにくいモノがよい

現代：金属（銅・錫、銅・ニッケル、金、銀）、紙、プラスチック、その他

歴史的には：貝貨（バイカ。貝殻）、石、絹（絹布）、布（麻布）、紙、米、大豆、麦、タバコ、金属（金、銀、銅、鉄など）

日本の中世と貨幣について　おさらい3

- 銭（貨）とは？　数え方と単位

金、銀、銅などの金属でつくられた貨幣。多く、円形で中央に穴があるもの。

江戸時代、銅・鉄でつくられた貨幣のこと（小学館『精選版日本国語大辞典』2006年）

- 中世の文献史料上の表記・異称

鳥目（ちょうもく）、青銅（せいどう）、要脚・用脚、料足（りょうそく）、用途（ようと・ようとう）など

● 単位・・・基本的には「文」とその1000倍の「貫文」

文は、重さの文目＝匁に由来。1枚＝約3.75ｇ（～4ｇ）

1枚＝1文　　1疋（ひき）＝10文、

1緡（さし・こん）＝100文　　1貫文・1結＝1000文

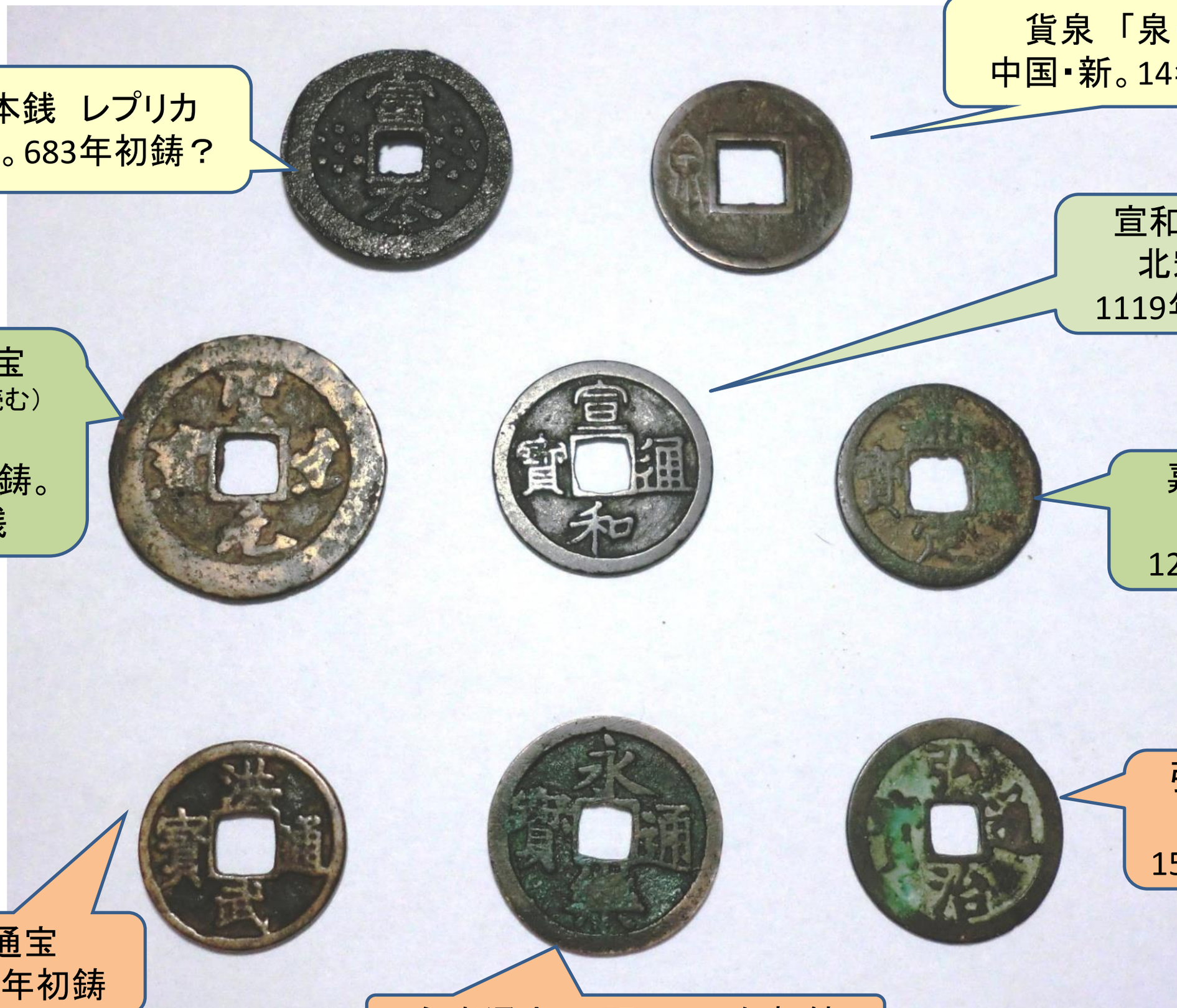
□ おカネではない銭（おもに江戸時代）・・・絵銭（えせん・えぜに）、

玩具の銭、神仏への奉納用の模型の銭・・・念仏銭、題目銭など

- おカネといっても銭でないとダメな場面：

お賽銭、六道銭、など

●銭図版



富本銭　レプリカ
日本。683年初鋳？

貨泉 「泉・貨」
中国・新。14年初鋳

宣和通宝
北宋。
1119年初鋳

聖宋元宝
（右回りに読む）
北宋。
1101年初鋳。
大型銭

嘉定通宝
南宋。
1208年初鋳

洪武通宝
明。1368年初鋳

永楽通宝　明。1408年初鋳

弘治通宝
明。
1503年初鋳

問1. 渡来銭はなぜ輸入されたのか？

● 通説：

- 12世紀後期、平清盛が日宋貿易を強力に推進。大輪田泊（おおわだのとまり。現在の神戸港）を拡張整備。中国宋（北宋：960～1126年、南宋：1127～1279年）と貿易を行い、宋銭を貨幣として輸入。
- 治承3年(1179)　朝廷では、宋銭による沽価法 (こかほう。公定価格表示法)を公認するか、宋銭使用の可否を論議。
- 『百錬抄』治承3年6月条で、「銭の病」の流行の記述

・・・この記事は、宋銭の大量流入という「病」とされる。

- 以降、鎌倉時代を通じて、日本国内に急速に普及。

暦仁2年(1239）の鎌倉幕府法99条によれば

（典拠：佐藤進一ほか編『中世法制史料集１』岩波書店）

本来、絹布で納入すべき陸奥国の年貢を、銭で納入する例が横行したため、白河関以東での銭の使用・流通を禁止。

・・・東北地方も含めて、全国に急速に銭が貨幣として普及した。

問1. 渡来銭はなぜ輸入されたのか？

- 前提：日宋貿易の理解をめぐって

宋との貿易は、平安後期にはかなり盛んであった

〔森克己　2008ほか〕

輸入品：香料・薬種、唐織物、文物、のちに銭、その他

輸出品：金（対価の支払手段）、その他

参考：1006年、宋の商人、蘇木ほかを藤原道長に献上

・・・この日宋貿易を一段と推進したのが、平清盛ら

問1. 渡来銭はなぜ輸入されたのか？

● 近年の成果

〔飯沼賢司 2014〕などによれば

1150年代を境に、銅製の経筒において、日本産材料のものが消滅して、中国産のものになる。

その後、宋銭は、日本国内の梵鐘などにも使用されていく。

〔平尾良光 2000〕などによれば

鎌倉大仏（1252年造立）の金属組成は、宋銭に近いという指摘。材料としての宋銭。

・・・平氏政権が、宋に求めた宋銭は、実は貨幣としてではなく、銅材料としてではないか。

・参考：銅銭の金属組成は、銅15：錫４：鉛１　程度

〔嶋谷和彦2001〕

問2. 鎌倉時代に使われていた貨幣とは？

● 鎌倉時代とは：

12世紀末、鎌倉幕府成立～1333年滅亡。

源頼朝が、鎌倉幕府を開いた。

幕府(東国)と朝廷(西国)という２つの「政府」。

荘園・公領制を基盤とした社会

（人、土地、税や経済・流通のしくみ）

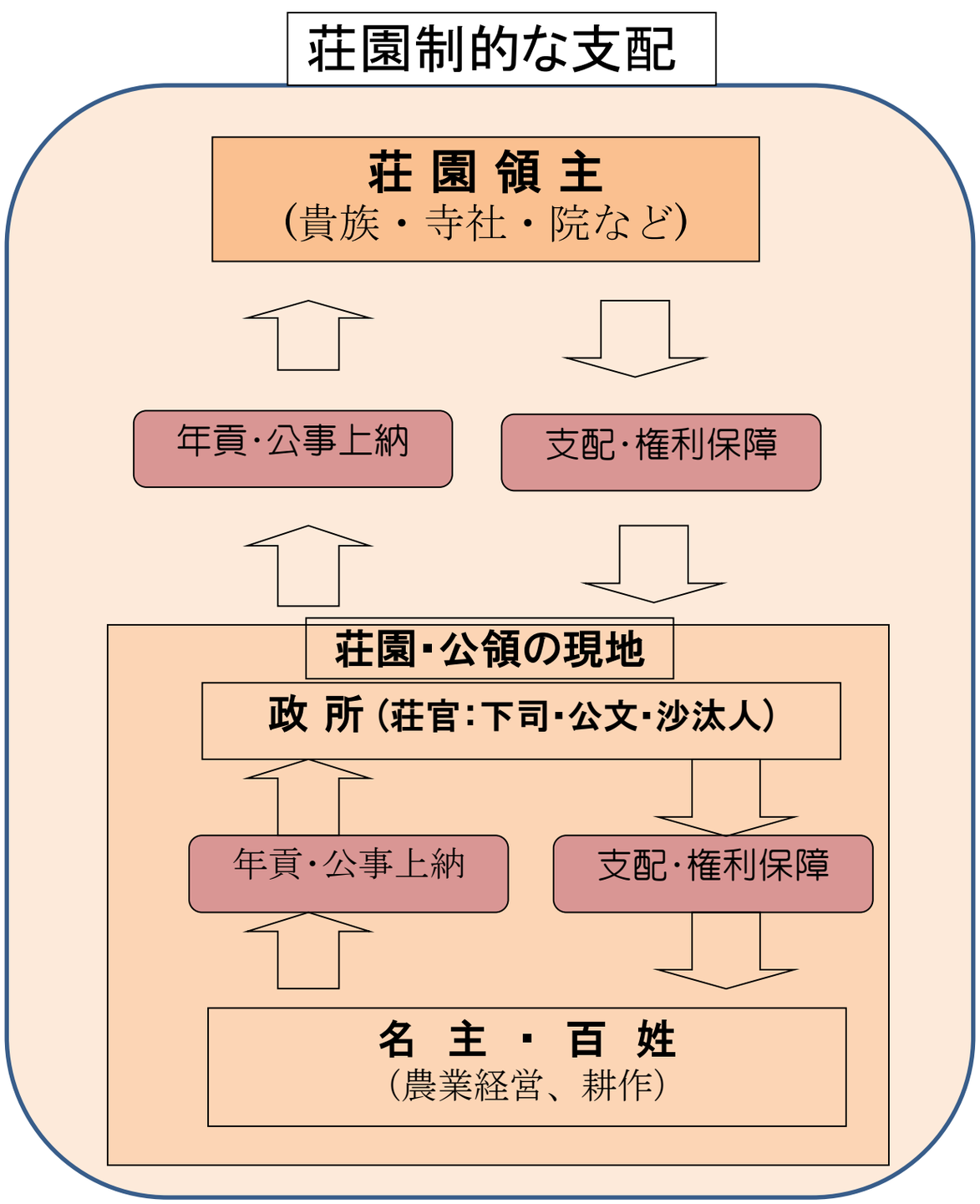
● 前提の12世紀中後期：平氏政権が、宋銭を輸入

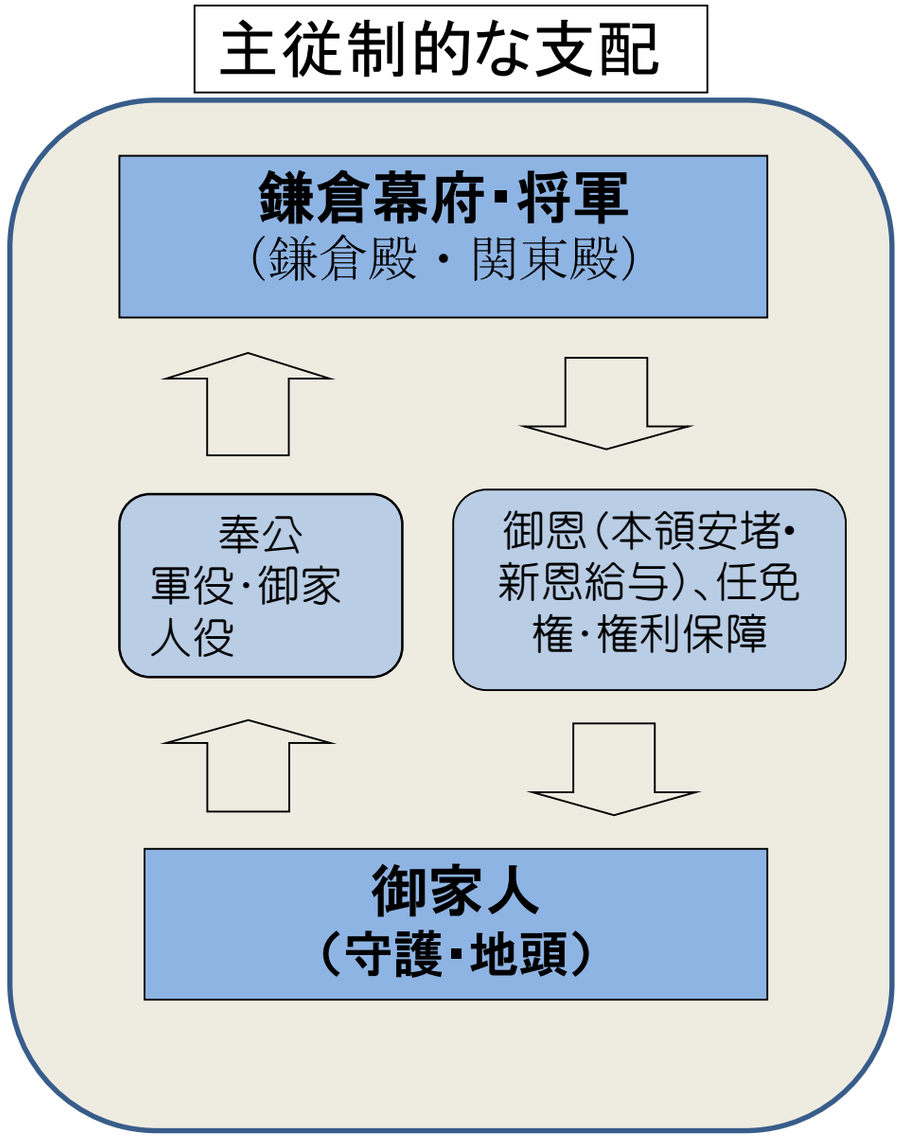
➢ 鎌倉時代に使われていた貨幣を

(1)租税データ

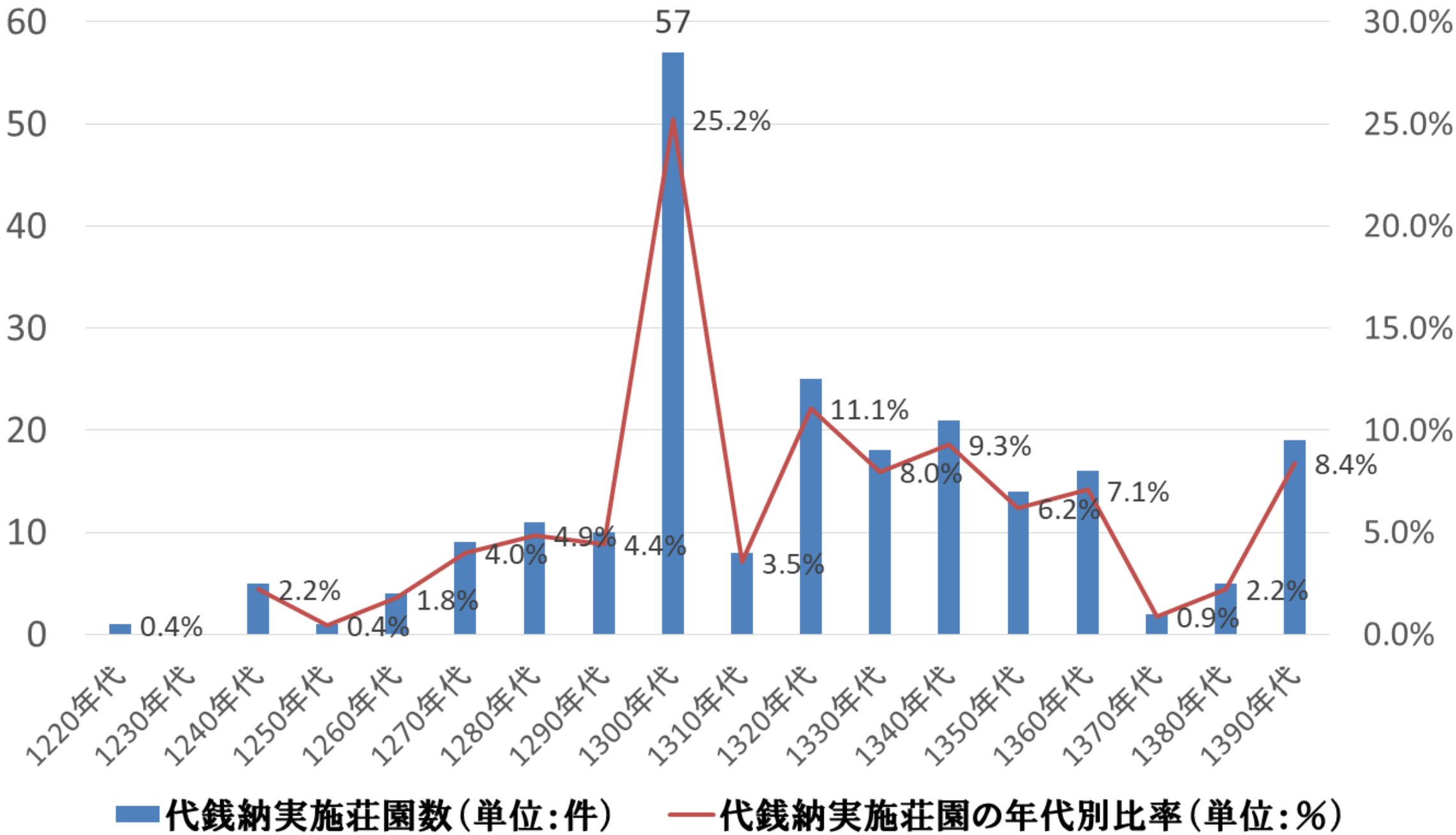
(2)土地売買契約書データ　　からよみとく

荘園公領制的支配と主従制的支配の関係図





(1)代銭納(税を銭で納めること)を検出した荘園数の推移(総件数:226件)

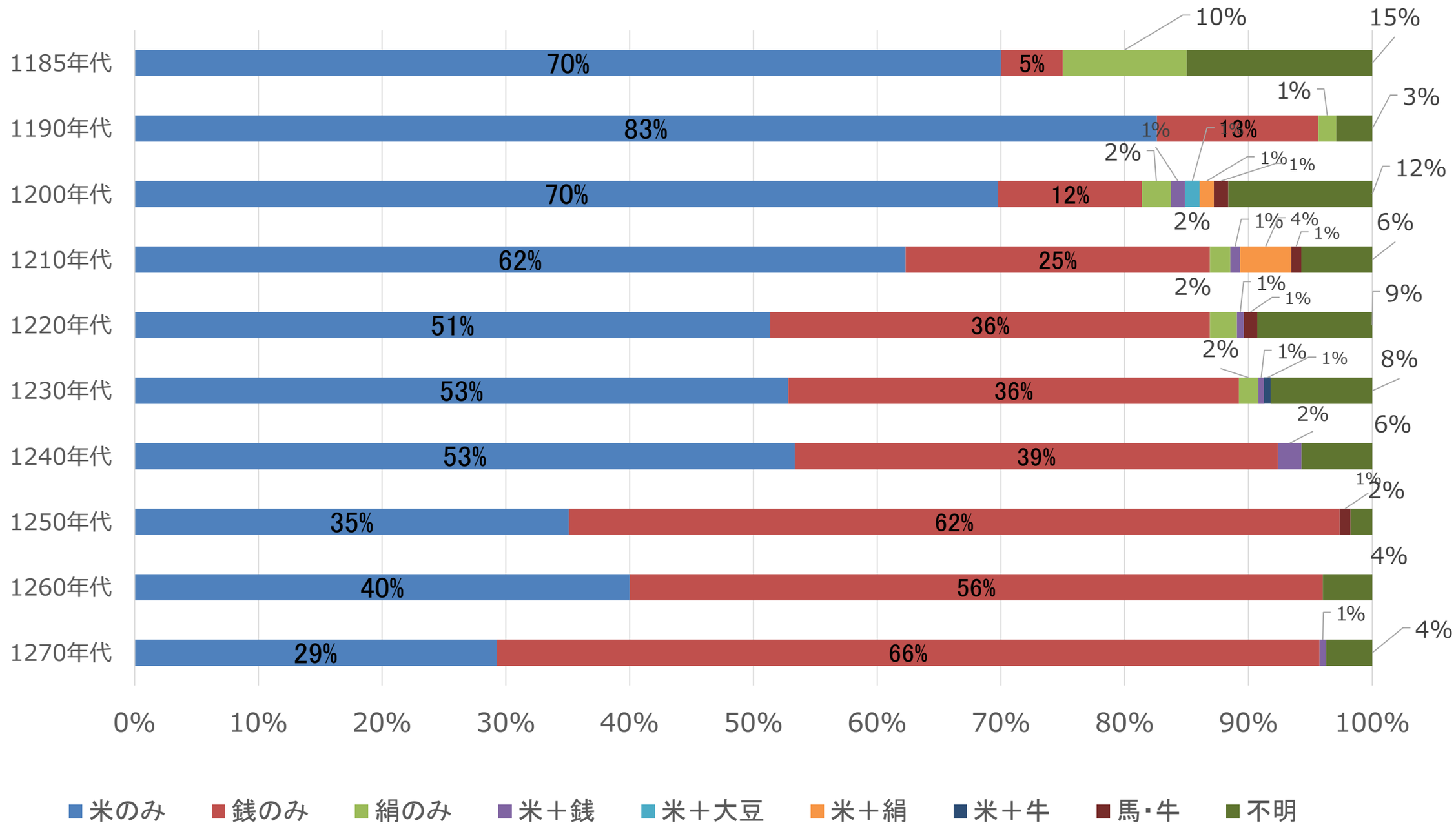


出典:〔佐々木銀弥　1972〕より作成

問2. 鎌倉時代に使われていた貨幣とは？

- 〔佐々木銀弥　1972〕によると
  荘園年貢の代銭納化は
  1300年代、1320年代に代銭納の検出件数が多い。
  1320年代、検出件数全体の57%で、半数を超える。
  ・・・13世紀末～14世紀前半期に銭が普及した
- 〔松延康隆　1989〕によると
  土地売券（土地等の売買契約書）の支払取引からみると
  鎌倉時代の貨幣・おカネとは、米と銭と絹布。
  1240年代までに、絹布はほぼ消滅。
  1250年代あたりから銭が普及し、米にとってかわる。
  1320年代には８割が銭での取引に
  ・・・銭が主要な貨幣に。一程度、米がずっと残るが

(2) 土地売券における支払手段の変化



出典：相澤理樹人・青木優（田中監修）「データから鎌倉時代をよみとく試み」〈キャンパス・コンソーシアム函館　合同研究発表会はこだてアカデミックリンク2016〉2016年）発表データ。

問2. 鎌倉時代に使われていた貨幣とは？

- 〔相澤・青木、田中　2016〕によると

  たしかに、米、絹、銭が主流であり、

  絹の消滅、米から銭への転換という趨勢　ではあるが・・・

あらためて細かくみてゆくと

1180年代～1250年代、米・銭・絹以外に、

牛・馬、大豆などの多様な支払手段の存在。

また、米、銭などの単独ではなく、組み合わせもある。

このことは、鎌倉時代、とくに1250年代までは、

米、銭、絹だけでなく大豆、牛・馬など、

多様な支払手段が試行された（試しに使われた）時期。

・・・だから併存していたのではないか。

やがて、米は一定の地位を占めるが、銭中心へと展開。

問3．日本中世に流通していた銭とは？

● 前提

➢ 15世紀後半期以降に、守護大名大内氏や室町幕府などによって発令された撰銭令にみえる銭種（・・・日常的な通用に支障が出ていた銭）は、永楽通宝（永楽銭）、宣徳通宝、洪武通宝など、すべて中国明（みん）の明銭。

→では、日常的に支障なく通用していた銭とは？
銭種が確認できないという苛立ち

問3．日本中世に流通していた銭とは？

- ここ30年間くらいの出土銭の発掘成果

〔鈴木公雄　1999〕〔永井久美男1994・1996〕などによると

- 全国的な出土銭の発掘成果によると、日本中世に埋められたとみられる銭は、その大部分が宋銭。<u>とくに北宋銭が多い</u>ことが判明。
- 埋められた銭とは、財産として蓄えていた銭。将来的にも通用する銭という認識。
- 北宋銭の銭種は多様だが、ついで、唐の開元通宝、南宋銭なども多く、明銭登場以降は、明銭も多く含む。日本の皇朝十二銭、その他のアジアの銭も。<u>これらが混在して流通。</u>
- 中国の大型銭は、周囲を削って、小型化して使用

（例えば〔田中浩司　2014〕参照）

・・・その後、列島各地で、ある程度の「個性」があることも判明

志海苔出土銭の銭種・枚数
（出土枚数上位10種）

順位	銭貨名	発行国	初鋳年	出土枚数	備考
1	皇宋通寶	北宋	1038	48,679	
2	元豊通寶	北宋	1078	45,173	
3	熙寧元寶	北宋	1068	36,447	
4	元祐通寶	北宋	1086	35,242	
5	開元通寶	唐	621	31,920	
6	天聖元寶	北宋	1023	18,528	
7	紹聖元寶	北宋	1094	15,937	
8	政和通寶	北宋	1111	15,823	
9	聖宋元寶	北宋	1101	15,396	
10	祥符元寶	北宋	1008	9,772	
				272,917	小計
	洪武通寶	明	1368	13	最新銭
	四銖半両	前漢	BC175	8	最古銭
	和同開珎～延喜通寶	日本	708～907	15	皇朝十二銭

〔中村和之・野村祐一　2012〕より田中が作成

問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

- 通説

律令国家が発行した皇朝十二銭以降、日本国内で本格的な鋳銭が行われたのは、江戸時代の寛永通宝など。

建武元年(1334)　乾坤通宝という銭と紙幣発行計画あり。

- 8世紀の私鋳銭問題

➢『続日本紀』和銅2年(709)正月25日条

和同開珎銀銭の私鋳に対する罰則規定の記事。

→私鋳銭の初見記事とされる。以降、私鋳の記事は頻出。

銭の私鋳が国家的な問題事

・・・銭の私鋳は、当時としては容易で、政府の工房以外でもよく行われていた可能性を示唆。

11世紀、銭の流通が相当に衰退。

皇朝十二銭（本朝十二銭）

- 皇朝十二銭＝律令国家が発行した和同開珎から乾元大宝までの12種類の銅銭（＋銀銭・金銭を含める考えもある）

①708年　和同開珎（銀銭・銅銭）発行―皇朝十二銭の最初
②760年　万年通宝(銅銭)、太平元宝(銀銭)、
　　開基勝宝(金銭)発行
③765年　神功開宝　　④796年　隆平永宝、
⑤818年　富寿神宝　　⑥835年　承和昌宝
⑦848年　長年大宝　　⑧859年　饒益神宝（にょうえきしんぽう）
⑨870年　貞観永宝　　⑩890年　寛平大宝
⑪907年　延喜通宝
⑫958年　乾元大宝（けんげんたいほう）―皇朝十二銭の最後

→銭は徐々に小型化、粗悪化（鉛の比率が増加）で信用を失う。
11世紀、銭の流通は大きく衰退（〔瀧澤武雄　1996〕などによる）

問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

- 12世紀の渡来銭の大量流入以降

➢ 全国各地での銭鋳型の発見

(1)堺(和泉国。大阪府堺市)での事例〔嶋谷和彦1998,2001など〕

堺環濠都市遺跡で、16Ｃ半ば～後半の多数の銭鋳型の発見

鋳型は、無文のものと渡来銭の銭文を2通り。

渡来銭の銭種は、開元通宝（唐）以外では、

皇宋元宝、元祐通宝、政和通宝などの北宋銭が多数。

永楽通宝（明）はない。

→堺での銭生産の可能性、実態。

大内氏の撰銭令(後述)の「さかひ銭」とは堺で生産された銭では？

堺の模鋳銭は金属組成をみると、銅の比率が高い〔嶋谷2001〕

問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

- 全国各地での銭鋳型の発見

(2)平安京八条院町（京都）などでの事例〔山本雅和　2001〕

13Ｃ後半～14Ｃの多数の銭鋳型の発見。

政和通宝、元豊通宝、紹(聖)元宝などの北宋銭が多数。

(3)鎌倉（神奈川県鎌倉市）での事例〔宗臺秀明　1997〕

13Ｃ末～15Ｃ初頭の多数の銭鋳型の発見。

開元通宝（唐）、政和通宝などの北宋銭が多い。

(4)博多（福岡市）での事例

- 永楽通宝の枝銭の発見

製塩遺跡「村松白根遺跡」(茨城県)から

永楽通宝の枝銭（えだぜに。製造途中のもの）が出土

→<u>日本中世において、渡来銭の模鋳銭の生産が行われていた</u>

問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

- 永楽通宝の国内生産を示す文献史料

「鳴海平蔵由緒書」覚（『古事類苑　泉貨部・称量部』所収）

応永年中(1394～1428)、足利公方勝定院義持公の御代、朝鮮国より永楽銭三千貫文（300万枚）を貢ぎ奉り、是れ珍宝なりとて、日本にて賞玩す。金銀との取替も高値にて、壱貫文は〈金壱両四分八分(ママ)〉と定むる。然れども、員数わずか三千貫文にて通用に足らざる故、我が朝（日本）にて、その後、永楽銭の鋳たし（鋳造）を仰せ付けられ候（命じられた）、此の節、京都に於いて、銭奉行職を仕り候、

→鳴海氏（江戸幕府で寛永通宝の鋳造に携わった家という）が、

応永年間以降に、国内で永楽通宝の鋳造を命じられ、京都で銭奉行職となっていた！という記事。

問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

- 永楽通宝の枝銭と「鳴海平蔵由緒書」の記述から
  永楽通宝が、日本国内で組織的に製造されていた可能性。
- 撰銭令にみえる永楽通宝　出典：佐藤進一ほか編『中世法制史料集第3巻』(岩波書店)
  - 文明17年(1485)　大内氏の撰銭令

第2条：利銭(利子付きの貸借)や売買の取引の銭では、
誰であっても、永楽・宣徳は選んで(排除して)はいけない。
①さかひ銭(堺銭?)、洪武銭、打平(うちひらめ)は排除せよ
・・・粗悪だから市中でも排除せよ
②永楽銭・宣徳銭は、100文に30文を混ぜて使用せよ
・・・市中では人気がないが、大内氏は通用させたいから

→永楽通宝は、市中の取引で忌避されており、
精銭(1枚＝1文以上の銭)より低めの価値で通用。

問4. 日本中世に銭の生産はあったか？

● なぜ永楽通宝などが嫌われたのか

➢ 国内製造の模鋳銭（永楽銭を含む）の特徴

金属組成として、銅が多い。錫、鉛が少ない。

・・・文字が不鮮明。鮮明な赤銅色（カッパー色）。

➢ 近年の問題提起〔三宅俊彦2001〕

永楽通宝（1408年初鋳）は、明国内ではほとんど流通していない。一種の輸出用の銭といえる。

→日本国内で、北宋銭や永楽通宝が模鋳(生産)されていたことは確実。

西国で永楽通宝が嫌われたのは、明では流通していなかったためか？　国内模鋳銭の特徴を持っていたためか？

問5. 16世紀の貨幣流通の地域性と多様性

- 撰銭令からみえる16世紀の銭の多様性

➢ 永正6年（1509）室町幕府撰銭令

京銭(きょうせん、きんせん)、打平（うちひらめ）は選ぶ（排除する）こと
渡唐銭（明銭の永楽銭、洪武銭、宣徳銭と、われ銭）以下をとりあわせて、
100文に32文を混ぜて使え。

出典：佐藤進一ほか編『中世法制史料集第2巻』（岩波書店）

➢ 永禄12年(1569) 織田信長撰銭令

「ころ」「やけ銭」「ゑミやう（恵明）」「大かけ」「われ」「すり」
「うちひらめ（打平）」「なんきん（南京）」

出典：佐藤進一ほか編『中世法制史料集 第5巻』（同上）

➢ 一定の価値をもつ特定の銭の登場〔本多博之 2006〕

戦国期の石見国では、「鍛(ちゃん)」「南京」という銭の存在
・・・銭○○文ではなく、 鍛△△文 といった表記

問5. 16世紀の貨幣流通の地域性と多様性

- 京都と地方

①16世紀、甲斐国（山梨県）で「南京」（なんきん）という低位銭の流通の事実（「妙法寺記」）

②16世紀、能登で年貢として納入された銭が、京都では悪銭とされ、受け取ってもらえない事例〔川戸貴史2008,田中浩司2007〕

③青森県内での出土銭が、粗製の銭の含有率が高いという事実〔工藤清泰　2001〕

→京都から離れた地域では、京都では通用しないような低品位の銭が、通用銭として流通していた可能性。

まとめと課題

- まとめ
  - 問１．渡来銭はなぜ輸入されたのか？
  - 問２．鎌倉時代に使われていた貨幣とは？
  - 問３．日本中世に流通していた銭とは？
  - 問４．日本中世に銭の生産はあったか？
  - 問５．16世紀の貨幣流通の地域性と多様性
- 上記以外にも多くの事実発掘

  16世紀の悪銭の増加、物価との関係

  1570年代の銭流通の衰退と米の復権

  16世紀の金銀の普及時期と用途

  織田信長の撰銭令の位置付け　　などなど

まとめと課題

- 全般に関する課題

➢ 金属組成などの自然科学的なデータ、考古学的なデータの蓄積は進んだが、文献史料による物価、金融などの経済データの不足。

→経済史的な裏付けの弱さ

- 中村先生の講演に接続する課題

➢ 渡来銭はどこから来たのか？

日本中世、海外との窓口は複数

南から？日本海側から？北から？

参考文献

- 飯沼賢司　2014「日本中世に使用された中国銭の謎に挑む」〔平尾良光ほか編 2014〕所収
- 池　享編　2001『貨幣―前近代日本の貨幣と国家―』青木書店
- 浦長瀬隆　2001『中近世日本貨幣流通史』勁草書房
- 川戸貴史　2008『戦国期の貨幣と経済』吉川弘文館
- 工藤清泰　2001「青森県浪岡城跡の模鋳銭」〔東北中世考古学会編　2001〕所収
- 黒田明伸　2003『貨幣システムの世界史』岩波書店
- 小葉田淳　1958『日本の貨幣』至文堂
- 小葉田淳　1968『日本貨幣流通史』刀江書院
- 桜井英治・中西聡編著　2002『新日本史体系12　流通経済史』山川出版社
- 櫻木晋一　2009『貨幣考古学序説』慶應義塾大学出版会
- 櫻木晋一　2016『考古調査ハンドブック15　貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社
- 佐々木銀弥　1972『中世商品流通史の研究』法政大学出版局
- 嶋谷和彦　1998「中世・堺で生産された銭」田中琢ほか編『古代史の論点３　都市と工業と流通』所収、小学館
- 嶋谷和彦　2001「堺の模鋳銭と成分分析」〔出土銭貨研究会　1997〕所収

参考文献

- 宗臺秀明　1997 「鎌倉出土の銭貨鋳型について」〔出土銭貨研究会　1997〕所収
- 出土銭貨研究会編　1997 『わが国における銭貨生産―出土銭貨研究会　第4回大会報告要旨―』
- 市立函館博物館　1973 『函館志海苔古銭』　市立函館博物館友の会
- 鈴木公雄　1999 『出土銭貨の研究』 東京大学出版会
- 鈴木公雄　2002 『銭の考古学』 吉川弘文館
- 鈴木公雄編　2007 『貨幣の地域史』 岩波書店
- 高木久史　2010 『日本中世貨幣史論』 校倉書房
- 高木久史　2018 『撰銭とビター文の戦国史』 平凡社
- 瀧澤武雄　1996 『日本の貨幣の歴史』 吉川弘文館
- 瀧澤武雄・西脇　康編　1999 『〈日本史小百科〉貨幣』 東京堂出版
- 田中浩司　2003 「十六世紀前期の京都真珠庵の帳簿史料からみた金の流通と機能」 峰岸純夫編『日本中世史の再発見』所収、吉川弘文館
- 田中浩司　2007 「貨幣流通からみた十六世紀の京都」〔鈴木公雄編　2007〕所収
- 田中浩司　2014 『(合同公開講座　函館学2012)函館志海苔出土銭と中世貨幣史研究』 キャンパス・コンソーシアム函館　函館学ブックレットNo.24

参考文献

- 田原良信　2003 「志海苔中世遺構出土銭の再検討」『出土銭貨』19号
- 田原良信　2004 「再考　志海苔古銭と志苔館」『(市立函館博物館)研究紀要』14号
- 東野治之　1997 『貨幣の日本史』 朝日新聞社
- 東北中世考古学会　2001 『中世の出土模鋳銭』 高志書院
- 中島圭一　1992 「西と東の永楽銭」 石井進編『中世の村と流通』所収、吉川弘文館
- 中島圭一　1999 「日本の中世貨幣と国家」〔歴史学研究会編　1999〕所収
- 中村和之・野村祐一　2012 「南北海道の古銭とベトナム銭「開泰元寶」の発見」『月刊　考古学ジャーナル』626
- 永井久美男編著　1994 『中世の出土銭』 兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男編著　1996 『中世の出土銭　補遺Ｉ』（同上）
- 平尾良光　2000 「大仏の材料の産地はどこか」 朝日百科日本の国宝別冊『国宝と歴史の旅7』 朝日新聞社
- 平尾良光・飯沼賢司・村井章介編　2014 『大航海時代の日本と金属交易』 思文閣出版

参考文献

- 本多博之　2006 『戦国織豊期の貨幣と石高制』 吉川弘文館
- 松延康隆　1989 「銭と貨幣の観念」『列島の文化史』6号　日本エディタースクール出版部
- 三宅俊彦　2005 『世界の考古学12　中国の埋められた銭貨』 同成社
- 森　克己　2008 『新訂　日宋貿易の研究』 勉誠出版
- 山本雅和　2001 「平安京八条院町と銭貨鋳型」〔東北中世考古学会編　2001〕所収
- 歴史学研究会編　1999 『シリーズ歴史学の現在１　越境する貨幣』 青木書店

キャンパス・コンソーシアム函館

合同公開講座

函館学　2018

第3回講義

講義資料

日本中世の貨幣をめぐる諸問題

15世紀以降の北海道における中国銭貨の流通

中村和之　函館工業高等専門学校教授

日時：平成30年12月1日（土）

13：30～15：00

会場：函館大学　　161講義室

函館学 2018

日本中世の貨幣をめぐる諸問題

15世紀以降の北海道における中国銭貨の流通

講師略歴

中村和之（なかむら　かずゆき）函館工業高等専門学校 教授

1956年 （昭和31年）北海道釧路市生まれ。北海道大学文学部卒業。1978年から釧路星園高等学校、1985年から札幌稲西高等学校、1998年釧路湖陵高等学校と、三校の高等学校に勤務する。2001年函館工業高等専門学校助教授、2002年から現職。2009年から2013年まで、および2016年から2018年までは同校の副校長を勤める。2010年より松前町文化財保護審議会委員、2012年より北海道文化財保護審議会委員、2013年より函館市文化財保護審議会委員、また2018年より法政大学国際日本学研究所客員所員を兼任している。

専攻は東洋史学。北東アジア史のなかでアイヌ史を研究している。函館工業高等専門学校に着任後は、文理融合型の研究を進めている。また、埋蔵文化財研究会の顧問として出土銭貨の調査も研究している。主な論文に「中世・近世アイヌ論」（『岩波講座日本歴史』20巻、岩波書店、2014年）、「南北海道の古銭とベトナム銭『開泰元寶』の発見―志海苔古銭と涌元古銭―」（『考古学ジャーナル』626号、2012年）など。

2018年7月、「加速器質量分析法による蝦夷錦の放射性炭素年代測定 ―「北東アジアのシルクロード」の起源を求めて―」（『考古学と自然科学』75号、2018年）で、日本文化財科学会の第12回論文賞を受賞した。

報告概要

函館市の志海苔古銭をはじめとして、北海道には五つの一括出土銭の存在が知られている。そのうち知内町の涌元古銭は996枚からなり、函館工業高等専門学校の埋蔵文化財研究会が10年間ほど調査と成分分析を続けている。また同じく知内町の上雷古銭は、僅か107枚であるが、一括出土銭ではないかと考えられ、志海苔古銭や涌元古銭と比較することによって、15世紀に渡島半島に流通していた銭貨の様子を推定することができる。

新日高町で発見された賀張古銭は、15世紀の末に埋められたと推定されるが、涌元古銭とよく似た銭類の組成をしている。このことから、1457年に起きた、コシャマインの戦い以降も、北海道のむかわ町の周辺には、和人の根拠地があったと推定される。これは出土銭貨という、制作年代が明確な遺物の調査によって、明らかにされる事実である。

15 世紀以降の北海道における中国銭貨の流通

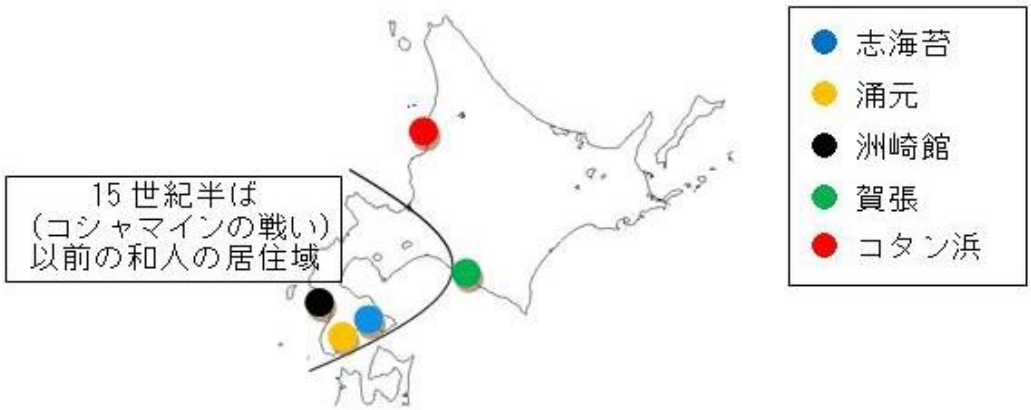
中村　和之

1.北海道の出土銭貨

日本列島では 12 世紀以降、中国の銭貨が大量に流通した。それらの銭貨は、北海道にも流入した。現在までに、北海道では 5 種類の一括出土銭が発見されている。

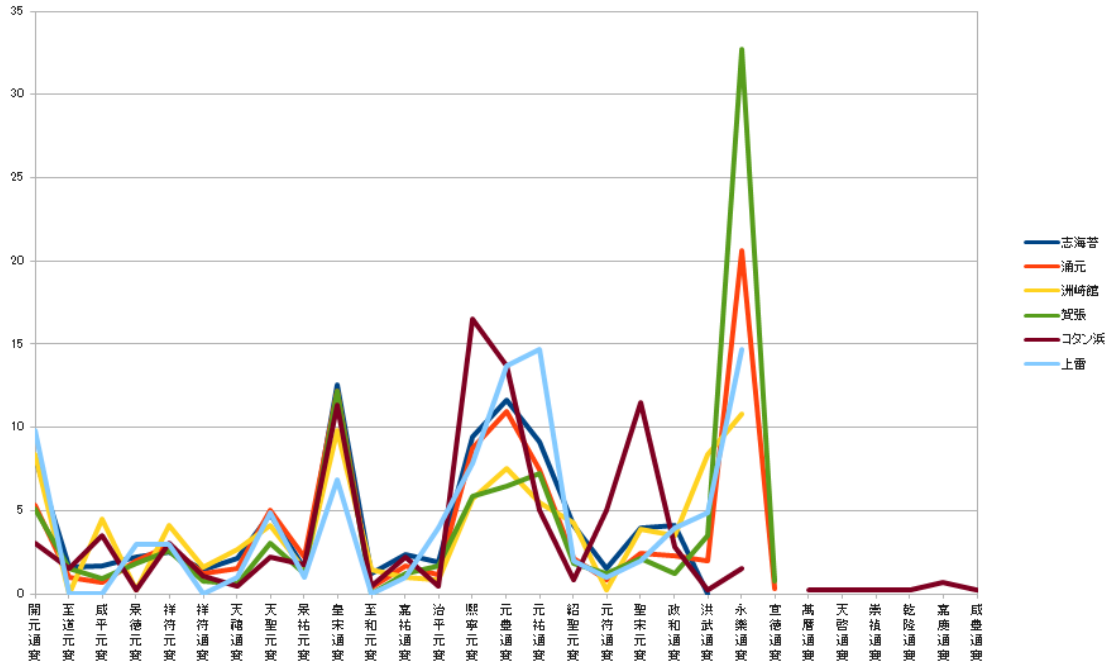
最初は、函館市の志海苔古銭である。志海苔古銭は、四銖半両（前 175 年初鋳）から洪武通寶（1368 年初鋳）までの 97 種類の古銭からなり、総計で 387,515 枚である。2 番目は、上ノ国町の洲崎館古銭である。洲崎館古銭は開元通寶（621 年初鋳）から永楽通寶（1408 年初鋳）までの 35 種類からなり、総計は 490 枚である。ただし洲崎館古銭の数字は、読むことができた銭貨の枚数であることに留意しなければならない。また洲崎館古銭はほとんど散逸しているので、現在では枚数を確かめることはできない。3 番目は、知内町の涌元古銭である。涌元古銭は開元通寶から宣徳通寶（1433 年初鋳）までの 39 種類からなり、総計は 996 枚である。4 番目は日高町の賀張古銭である。賀張古銭は開元通寶から宣徳通寶までの 35 種類からなり、総計は 664 枚である。5 番目は、留萌市のコタン浜古銭である。コタン浜古銭は開元通寶から咸豊通寶（1851 年初鋳）までの 43 種類からなり、総計は 460 枚である。函館市、知内町と上ノ国町は、北海道の南西部の渡島半島に位置する。日高町は北海道の南部に位置し、留萌市は北海道の北部に位置する。なお最近、6 番目の一括出土銭の可能性がある銭貨として、知内町の上雷古銭の実態が明らかになった。開元通寶から永樂通寶までの 18 種類からなり、総計は 107 枚である。

一括出土銭のほかに、遺跡を発掘する際に一枚ずつ見つかった銭貨がある。これらの銭貨を single find と呼んでいる。北海道の single find の銭貨については、まだ集成がなされておらず、実態がわかっていない。



2.銭種比率からみた北海道の一括出土銭の特徴

下のグラフは、それぞれの一括出土銭に含まれる銭貨の比率を%で示したグラフである。

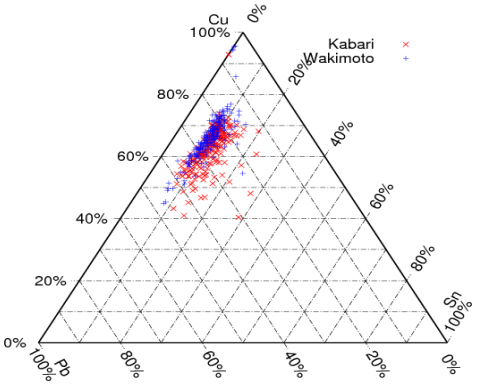


開元通寶が最も古く、咸豊通寶が最も新しい。なぜこの銭貨を選んだのか、その理由を以下にのべる。まず筆者は、最も枚数が多い志海苔古銭に注目した。志海苔古銭の上位 20 位までの古銭と、最新銭である洪武通寶を選んだ。つぎに志海苔古銭には含まれていないが、それ以外の一括出土銭には含まれている永楽通寶から咸豊通寶までの明銭・清銭 8 種類を加えた。全部で 29 種類となる。この比率で比較する手法によって、枚数が違う一括出土銭を比較することが可能になる（三宅 2005）。

コタン浜古銭を除く五つの一括出土銭の銭貨の種類ごとの比率、これを銭種組成という、は似ているので、まずこの四つについて検討する。まず確認しておきたいことは、これらの五つの一括出土銭の銭種組成は、本州の東北地方の一括出土銭の銭種組成と類似することである。したがって、これらの古銭は本州から持ち込まれたと推定される。15 世紀には、道南十二館を代表とする和人の館が渡島半島に築かれた。志海苔古銭は道南十二館のひとつである志苔館（しのりだて）の近くから出土している。洲崎館古銭や涌元古銭も和人の館の近くから出土している。和人の館は、軍事的な機能とともに、交易の拠点としての機能も持っていた。したがって、これらの銭貨は館の支配者の元に集積されたものと考えられる。

では、志海苔古銭・洲崎館古銭・涌元古銭・賀張古銭の銭種組成を細かく検討してみよう。開元通寶から政和通寶（1111 年初鋳）まではよく似ている。差が生じるのは洪武通寶以降の状況である。まず、志海苔古銭は洪武通寶が最新銭である。洲崎館古銭は永楽通寶が最新銭である。涌元古銭と賀張古銭は永楽通寶の比率が高いという特徴があり、宣徳通

寶が最新銭である。志海苔古銭は、1457 年から始まるコシャマインの戦いが原因で埋納されたと推定され、15 世紀の半ばころに埋納されたと考えられる。涌元古銭と賀張古銭は、永楽通寶が日本に伝来して北海道まで持ち込まれる時間を考えると、15 世紀の終わりころに埋納されたと考えられる。右の三角ダイヤグラムは、涌元古銭と賀張古銭に含まれる永楽通寶の成分比を示している。両方の永楽通寶の成分はよく似ており、同じ時代に埋められたとする先の解釈を支持する。洲崎館古銭の埋納年代は、志海苔古銭の後で、涌元古銭と賀張古銭よりは前と推定される。その理由は、永楽通寶の比率がそれほど高くないからである。永楽通寶から北海道に持ち込まれ始めてから、さほど時間がたたない時期に洲崎館古銭は埋納されたのであろう。上雷古銭については、なお慎重な考察が必要であろう。



なお涌元古銭からは、ベトナム銭の開泰元寶（1324 年初鋳）が 1 枚見つかっている。今のところ、日本で唯一の出土例である。この開泰元寶は、ベトナムから直接日本へ来たのではなく、中国を経由して日本に持ち込まれたものと考えられている（野村・中村 2012）。

永楽通寶は、日本では多く出土する銭貨である。しかし三宅俊彦氏の研究によって、永楽通寶は中国ではほとんど出土しないことがわかっている（三宅 2005）。またロシア連邦の沿海地方でも、出土例の報告がない（三宅・イーヴリエフ 2008）。したがって、北海道で出土する永楽通寶は、本州から持ち込まれたものと考えて良い。

さて、涌元古銭と賀張古銭の埋納年代が同じであるとすれば、これからわかることについて私見をのべたい。1457 年から始まるコシャマインの戦いは、北海道におけるアイヌと和人（日本人）との関係を大きくかえた。松前藩の公式の歴史書である『新羅之記録』によれば、コシャマインの戦いが始まる前は、和人の居住する地域は、日本海側は現在の余市町、太平洋側は現在のむかわ町まで拡大していた。ところがコシャマインの戦いによって、和人の居住地域は、現在の知内町から上ノ国町の間という、渡島半島の西南端のごく狭い地域に縮小した。さて賀張古銭は、むかわ町まで拡大していた和人の居住地域から供給されたものと考えられる。賀張古銭の埋納年代が 15 世紀末であることから、コシャマインの戦いが起きてから 40 年ほどは、むかわ町の和人の居住域が維持されていたと推定される。文献史料では、和人の居住域の縮小がどのように進んだのかについて、つぎのように記されている。まず『新羅之記録』（1646 年成立）には、

康正二年夏より大永五年春に迪(いた)るまで、東西数十日程の中に住する所の村々里々を破り、者某(シャモ)を殺す事、元は志濃里(しのり)の鍛冶屋村に起るなり。活(い)き残りし人皆松前と天河(あまのかわ)とに集住す。

とある。和人の勢力圏の縮小は、康正 2 年（1456）から大永 5 年（1525）の間のいずれかに起きたこととされていた。しかし『福山秘府』年暦部、〔大永〕五年乙酉の条には、

松前年代記曰く、春東西の蝦夷蜂起し、人の亡せし者多し。恙無(つつがな)き者は松前と天河に住す。

とあり、大永 5 年（1525）に大きな争乱があって、和人の居住圏が渡島半島の西南端に縮小したと読むことができる。同様の記述は、早稲田大学図書館蔵の『松前舊事記』にも、

〔大永〕五年春、東西之蝦夷蜂起して人民多数殺害ス、夫より残し者共松前と天野川(あまのがわ)ニ寄集リ住居ス、

ある。このように大永 5 年（1525）に和人の居住域が縮小したとするのが事実だとすれば、出土銭貨の研究とも符合する。15 世紀末から 16 世紀初頭までは、太平洋側の和人の居住域が維持されていた可能性を示唆するからである。

最後に残ったコタン浜古銭の性質は、現在の研究状況では分析が難しい。コタン浜古銭の最新銭は 19 世紀の中ごろである。コタン浜古銭の大部分は、唐銭・北宋銭・明銭であり、北海道で発見されたほかの出土銭貨の銭種組成と良く似ている。違う点は、明代晩期から清代の銭貨 8 枚が含まれている点である。ではコタン浜銭貨のこのような特徴は、どのようにして生じたのであろうか。筆者は、コタン浜古銭に含まれる中国銭貨は、二つのグループに分けられると考えている。第一のグループは唐銭から明代初期の銭である。これらの銭は、志海苔古銭などと同様に本州から北方の北海道に持ち込まれたものであろう。その理由は、銭種組成に類似している点が多いからである。第二のグループは、万暦通寶（1576 年初鋳）以降の明代晩期から清代の銭貨である。これらの銭貨は、アムール河下流域からサハリン島を経由して北海道に持ち込まれものであろう。サハリン島の出土銭貨の傾向と一致するからである。18 世紀から 19 世紀の前半には、サハリン島を経由してアムール河下流域と北海道を結ぶ交易が行われていた。日本ではこの交易を、山丹(さんたん)交易と呼んでいる。第二のグループの銭貨は、山丹交易によって北海道にやってきたのであろう。この二つのグループの銭貨は、本来は別な起源のものであるが、留萌市で一緒になったと考えられる。コタン浜古銭は、20 世紀の初めに留萌港が修築される際の土木工事によって発見されたという経緯がある。考古学的な発掘によるものではなく、出土状況はわかっていない。筆者は、コタン浜古銭を一括出土銭として扱ったが、一部 single find が混じっている可能性もある。

3.北海道とサハリン島の銭貨の流通

15 世紀以降の日本列島における中国銭貨の流通は、北海道がその北限となり、サハリン島に及ぶことはなかった。しかもその流通範囲は、和人の居住範囲にほぼ限られたようで

ある。アイヌの居住範囲では、銭貨は装飾品として受容されたのではないかと考えられる。

サハリン島の中国銭貨は、アムール河下流域からもたらされた。サハリン島では、銭貨は装飾品として受容され、銭貨として流通することはなかった。サハリン島で発見される銭貨に大銭が多いこと、それらの大銭に穴が空けられていることなどは、銭貨が装飾品であったことを示している。

日本で出土する銭貨の大部分は、1 枚 1 文で通用した小平銭である。しかし例外的に、大銭が出土することもある。大銭の出土は西日本に偏り、関東から東北地方では出土しないが北海道に 3 例、青森県に 1 例の出土例がある。かつて吉成直樹は、これらの大銭が海のネットワークによって南からもたらされたのではないかと推定した（吉成 2007）。しかしサハリン島における大銭の出土をみれば、北海道と青森県の大銭はサハリン島を経由して北から持ち込まれたものと考えなければならない。

最後に、近世以降の状況についてのべて結びとしたい。日本では、寛永通寶（1636 年初鋳）が発行されると、中国銭貨は急速に流通界から姿を消した。清銭がサハリン島でしか出土しない理由も、北海道が寛永通寶の流通する範囲となったからである。さらにサハリン島でも清銭と並行して寛永通寶が出土するようになる。これは 18 世紀以降、松前藩や幕府の勢力がサハリン島に及ぶことを反映していると思われるが、その詳細の検討は今後の課題である。

［参考文献］

野村祐一・中村和之 2012「南北海道の古銭とベトナム銭『開泰元寶』の発見－志海苔古銭と涌元古銭－」『考古学ジャーナル』第 626 号。

三宅俊彦 2005『中国の埋められた銭貨』同成社。

三宅俊彦・アレクサーンドル=L.イーヴリエフ 2008「北東アジアの銭貨流通－金代を中心に－」菊池俊彦・中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ－奴児干永寧寺碑文とアイヌの北方世界』高志書院。

吉成直樹 2007「アイヌ社会と三つ巴紋」吉成直樹編『声とかたちのアイヌ・琉球史』森和社。